

## 角は男性だけのものにあらざ

ウマール・ファクルディン

角(つの)というと男性的なイメージが強い。オスは自分のパートナーを見つけるのに角を誇示するという。だからこのエッセイのタイトルもちよつとずれた感じがするだろう。しかし、ここでは動物の世界の角を語るうとしていっているのではなく、インドネシアのある地方で作られている代表的な工芸品である角についてお話したいのである。美しくかつ実用的な角の工芸品を嗜好するのは女性達である。

牛や野牛の角は往々にして無価値なものとみなされていた。しかし、中部ジャワのマゲラン地方のスカン地区デサ・プカン(デサは村のこと)の村人の見方はちがっていた。デサ・プカンは仏教遺跡で有名なポロドゥールから北に二〇キロ、ジョクジャカルタは北へ八四キロ離れたところに位置する。角は彼らの収入源となった。デサ・プカンは、一九六〇年代に角を材料に使い工芸品を制作するようになった。角は他では見られない見栄えのする商品に生まれ変わった。角工芸品には他の素材、例えば木材も使用された。木工芸品や角・木工芸品は一九九〇年代になってから盛んに生産されるようになった。村は「デサ・プカン角木工芸産業センター」と知れ渡るようになった。木材を補完的な材料として使用したのにはいきさつがある。木を使うことにより職人の創造性への欲求が満たされたし、また角の供給が減ったという事情もあった。角の供給が減った背景には角が生えていない子どもや年取った牛が多く屠られるようになったという事情がある。この地域のある工芸職人によるとそれまでは動物の角はジャワ島の多くの都市に屠畜場があったため手に入れることができた。しかし、原材料としての角の供給が減ったため、ジャワ島以外の島—スマトラ、スラウェシ、

カリマンタン島—から運ばれるようになった。これら三つの島では、角は豊富に取れたが輸送経費が高値であったことが障碍となった。デサ・プカンの職人の匠技が野牛や牛の角を木材と組み合わせて工芸品に仕立ててゆく。そうしてできあがった家具、小間物、装飾品には目を見張るような芸術の香りがする。スプーン、ご飯茶碗、ケブクと呼ばれる宝石箱、櫛、パイプ、フォークなどなど。これらの角製品はプラスチック製品と競合するものであるが、角は有機的な原材料であるため環境汚染を引き起こさず、またリサイクルも可能であるため環境に優しい。角で作ったスプーン、ナイフ、フォークなどの食器は健康上の理由からより安全であると考えられている。角は、動物の一部でありその製造過程において化学合成物質が生じない。従来、角製品とくに食器—のほうがポリマーやプラスチックの製品より優れているとの科学的な証明はないが、プラスチック製品と違い角製品は熱にも強いのは事実である。角の加工プロセスはシンプルである。まず角をきれいに水洗し、熱する。そうすると弾力性が少し出て柔らかくなる。熱していらしたものを製品のかたちにしていくのである。紙ヤスリをつかって表面をなめらかにし、光沢をつけていく。

デサ・プカンの角・木工芸品センターはその製品を国内の大都市—スラバヤ、ヨクジェカルタ、ジャカルタ、バリ、バンドン—などに出荷している。インドネシア国内の大都市市場に留まらず、角木材製品はヨーロッパ各地にも輸送され割合と安価な値段で売られている。例えば、櫛は日本円で一〇〇円ほど。また木製の壁掛け時計は四〇〇円、木製の杖が一五〇円である。装飾性が高まるお値段は高めとなる。美しく装飾した龍像は二五〇円となる。

角工芸は世代から世代に引き継がれていく文化遺産である。源流をたどると角を使った考古学的な遺品にたどり着く。元来、角は誇りと栄光の象徴であった。トラジャ、スラウェシ、北部スマトラの一地方では、角が家族や部族の威信のシンボルとして使われていたことが知られている。今日、角工芸センターで製作されている工芸品は、古代の先祖の文化がその時代時代の創作性やトレ

ンドとミックスして世代を超えて継承されてきたのである。角という副産物を利用して生活の糧をえるという人々の創造性の顕われである。別の見方をすれば地域の経済を発展させるうえでの共同体のエンパワメントのひとつの顕われとして角工芸があるともいえる。角工芸は中央ジャワ、マゲランのデサ・プカンだけではなくジャワ島の各地に見られる。記録によるとジョクジャカルタのプルバヤン、ソロのクルエル、ウエストジャワのサカプミ等である。デサ・プカンを含め、これらの四都市は現在も角工芸の中心地である。ジャワには角生産のセンターがかなりある。前述したように元手と原材料の不足が職人にとつてのボトルネックになっている。中央政府、地方政府がともに生産活動が続けられるよう職人達の抱える問題の解決に取り組んでいる。角工芸産業を維持することの重要性は文化の継承という観点に加え、工芸品が生み出す付加価値にある。眼鏡フレームの有名ブランド、ローデンシユトックはスカプミ角工芸を眼鏡フレームの一部に使用し独自のデザインを生み出している。

最後になったが、もし読者のみなさんがインドネシアを訪問する機会があったら是非角工芸センターに立ち寄ってみて欲しい。工芸品のひとつひとつをよくご覧頂きたい。ご満足頂けるはずである。

Mr. Umar Fakrudin / アジア経済研究所 開発スクール外国人研修生

Junior Researcher

Center of Trade Policy Analysis and Development for Foreign Trade, Trade Policy Analysis and Development Agency, Ministry of Trade (商業省)